

実はイケてる寅次郎

10K051 田川 葵

まえがき

わたしが「男はつらいよ」と出会ったのは高校2年生のときだ。

その当時わたしは『Always三丁目の夕日』という昭和30年代の日本を舞台にした映画にはまっていた。というか、その映画で茶川竜之介役をしていた吉岡秀隆にはまっていた。ナヨナヨとした独特の雰囲気や高めの声、猫背気味のあまり男らしくない体つきなど、彼のすべてがツボだった。そんな歳でもないだろうに「吉岡さんと結婚したい！」と夢見るほどお熱だった。

吉岡秀隆についてインターネットで調べてみると「男はつらいよ」に出演していることがわかった。「男はつらいよ」。有名な映画シリーズのため名前は知っていたが、観たことは一度もなく、たぶんこの先も観ないだろうと思っていた。しかし、我が麗しの吉岡さんが出ていることを知った今、これは観ないわけにはいかないだろう。わたしはパソコンの前で鼻息を荒くした。

はじめて観たのは第48作「寅次郎紅の花」である。キャー、吉岡さん！若い！若いわ！若いゆえに、お肌が若干花盛りなのが気になるけど、そこもまたかっこいい！吉岡さんの姿が拜めたわたしはかなり興奮していた。吉岡さんが演じているのは満男って人なのねえ。へえ。満男かあ。やっぱりちょっとナヨナヨしてるなあ。でも、そこがステキ。

ストーリーもおもしろかった。「若鶏のからあげ…」(ファミリーレストランで泉ちゃんが結婚することを知った満男は、動揺を悟られないようにメニューで顔を隠してそうつぶやく)というセリフに大笑いして、何度もくり返した。「男はつらいよ」はおじさんが観る映画だ、と思っていたが、これはおもしろい。みんな、観たほうがいいよ。わたしは続けてほかの作品も観てみることにした。

わたしは吉岡さんが見たかったので、満男・泉ちゃんシリーズ(42作目以降満男と泉ちゃんの恋模様が中心となる)を先に全部観た。満男・泉ちゃんシリーズを制覇して、ちょっと残念な気持ちになった。残るは満男メインでない作品ばかりだ。寅さんもおもしろいけど、わたしはやっぱり満男がいい。しかし、せっかくだから、と観た第1作「男はつらいよ」がわたしを変えた。

何！？寅さんって、こんなにおもしろいの！？「見上げたもんだよ屋根屋のふんどし」みたいなフレーズとか、おいちゃんやタコ社長とのケンカとか、惚れっばいところとか、全部おもしろかった。第1作の寅さんは満男・泉ちゃんシリーズに比べると見違えるくらい若くて、恋しても、ふられても、泣いても、笑っても、怒っても元気いっぱいだった。満男がいないと味気ないんじゃないか、なんて心配は無用だった。寅さんは一瞬にしてわたしの心をわしづかみにした。

寅さんファンとなったわたしは、次々に作品を観ていった(次々に、とは言っても気に入った作品があると、くり返し観るので、未だ全作品は制覇していない)。寅さんはいいなあ。寅さんを見ると元気になる。明日からまたぼちぼちやってくか、と前向きな気持ちになれる。「男はつらいよ」はいい映画だなあ。

しかし、ちょっと考えると、どうして寅さんに惹かれるのかわからない。堅気になれ、とみんなから言われている寅さんはテキヤのまま、一年中旅の空だし、懲りずに恋と失恋をくり返しているし、印刷工場はずっと経営不振で社長はいつも「困った、困った」と言っているし、物事は何も好転していない。でも、寅さんを観ると確実に元気になれるのだ。

その理由が知りたくて、卒業論文のテーマを「男はつらいよ」にした。理由なんか考えなくてもいいものはい、好きなものは好き、でもいいかもしれない。しかし、人々を魅了するその理由を知る、または

考えることで、より「男はつらいよ」について深めることができる。そして、今よりもっとファンになるだろう。

わたしはこれからも「男はつらいよ」を観続けていきたい。寅さんとともに生きていきたい。この論文はその一歩というわけだ。

第1章 「男はつらいよ」についての基礎知識

1 「男はつらいよ」とは

「男はつらいよ」（松竹映画）とは、山田洋次原作・脚本・監督（一部除く：第3作「男はつらいよ フーテンの寅」は森崎東、第4作「新 男はつらいよ」は小林俊一が監督を担当した）、渥美清主演で1969年～1995年までの26年間に全48作品が公開された国民的映画シリーズである。1983年には「一人の俳優が主演を演じた最も長い映画シリーズ」としてギネスブックに認定された。

そもそも「男はつらいよ」は、全26話のテレビシリーズとして誕生したものである。1968年、フジテレビで渥美清主演の連続ドラマを作ることになった。そのとき渥美清は、脚本を山田洋次に依頼するように主張した。脚本を書くことになった山田洋次は、渥美清と、どんな内容のドラマにするか話し合うことにした。打ち合わせのような気張ったものではなく、ただ雑談をしよう、と山田洋次は提案し、スタッフを交えて旅館でゆっくり話をしたそうだ。話は互いの苦労話になり、若い頃に会った仲間たちのおかしなキャラクターについて話して、笑い合った。その中でも、渥美清がしたテキヤの話に山田洋次は関心を持った。そこからアイデアをふくらませてできたのがテレビドラマ版「男はつらいよ」のシナリオである。

連続テレビドラマ「男はつらいよ」は好評だった。しかし、好評、とは言っても、特別高い視聴率を得たわけではなかった。だが、シリーズ最終回の「主人公である寅次郎（寅さん）が、ハブに噛まれて死んでしまう」というエピソードに対して視聴者からの抗議が殺到した。視聴率はともかく、意外に熱烈なファンがいたことを知った山田洋次は感動し、もう一度寅さんを甦らせようとした。そこで思いついたのが「男はつらいよ」の映画化である。

「男はつらいよ」の映画化が松竹の企画会議に提出されたとき、企画会議のメンバーは総じてあまり乗り気でなかったらしい。山田洋次にはファンの要望に応えたいという熱意があったが、会社側は「テレビの二番煎じなどいまさら」という受け止め方だったようだ。山田洋次も渥美清も、その当時はまだそれほど強い発言力を持っていたわけではなく、企画はダメになりかけていた。そのとき「山田洋次がどうしてもやりたいと言うのなら、やらせたらどうか」と企画を通させたのは松竹会長の城戸四郎だったと言われている。

こうして1969年8月27日に第1作「男はつらいよ」が公開され、シリーズの歴史が始まった。作品を追うごとに人気は高まり「寅さんなくして盆も正月もない（第1作公開以来、毎年盆と正月に新作が出されてきたから。ただ、主演の渥美清の体調がだんだん悪くなっていった関係で、42作目くらいから1年に1本のペースになっている）」と言わしめるほど日本の風物詩となった。

物語は、渥美清演じる主人公「フーテンの寅」こと車寅次郎が約20年ぶりに故郷の葛飾柴又に帰ってきたところから始まる。以後、柴又と、寅次郎が訪れる日本各地を舞台に物語は展開されていく。寅次郎が旅先で出会ったマドンナと恋愛模様をくり広げながら、何かと騒動を起こす人情喜劇、というのがシ

リーズ全作品に共通する基本のストーリーである。毎回登場する豪華なマドンナ、ゲスト陣や日本各地の美しい風景も見どころのひとつとなっている。

「男はつらいよ」は、主人公の名前から作品自体が「寅さん」の愛称で呼ばれることも多い。リアルタイムで作品を観たことがない世代にもファンはたくさんいる。「男はつらいよ」は今なお幅広い世代から愛される映画シリーズなのである。

2 「男はつらいよ」全48作品

- 第1作 男はつらいよ (封切日：1969年8月27日)
- 第2作 続 男はつらいよ (1969年11月15日)
- 第3作 男はつらいよ フーテンの寅 (1970年1月15日)
- 第4作 新 男はつらいよ (1970年2月27日)
- 第5作 男はつらいよ 望郷篇 (1970年8月26日)
- 第6作 男はつらいよ 純情篇 (1971年1月15日)
- 第7作 男はつらいよ 奮闘篇 (1971年4月28日)
- 第8作 男はつらいよ 寅次郎恋歌 (1971年12月29日)
- 第9作 男はつらいよ 柴又慕情 (1972年8月5日)
- 第10作 男はつらいよ 寅次郎夢枕 (1972年12月29日)
- 第11作 男はつらいよ 寅次郎忘れな草 (1973年8月4日)
- 第12作 男はつらいよ 私の寅さん (1973年12月26日)
- 第13作 男はつらいよ 寅次郎恋やつれ (1974年8月3日)
- 第14作 男はつらいよ 寅次郎子守唄 (1974年12月28日)
- 第15作 男はつらいよ 寅次郎相合い傘 (1975年8月2日)
- 第16作 男はつらいよ 柴又立志篇 (1975年12月27日)
- 第17作 男はつらいよ 寅次郎夕焼け小焼け (1976年7月24日)
- 第18作 男はつらいよ 寅次郎純情詩集 (1976年12月25日)
- 第19作 男はつらいよ 寅次郎と殿様 (1977年8月6日)
- 第20作 男はつらいよ 寅次郎頑張れ! (1977年12月24日)
- 第21作 男はつらいよ 寅次郎わが道をゆく (1978年8月5日)
- 第22作 男はつらいよ 噂の寅次郎 (1978年12月27日)
- 第23作 男はつらいよ 翔んでる寅次郎 (1979年8月4日)
- 第24作 男はつらいよ 寅次郎春の夢 (1979年12月28日)
- 第25作 男はつらいよ 寅次郎ハイビスカスの花 (1980年8月2日)
- 第26作 男はつらいよ 寅次郎かもめ歌 (1980年12月27日)
- 第27作 男はつらいよ 浪花の恋の寅次郎 (1981年8月8日)
- 第28作 男はつらいよ 寅次郎紙風船 (1981年12月29日)
- 第29作 男はつらいよ 寅次郎あじさいの恋 (1982年8月7日)
- 第30作 男はつらいよ 花も嵐も寅次郎 (1982年12月28日)
- 第31作 男はつらいよ 旅と女と寅次郎 (1983年8月6日)
- 第32作 男はつらいよ 口笛を吹く寅次郎 (1983年12月28日)
- 第33作 男はつらいよ 夜霧にむせぶ寅次郎 (1984年8月4日)

- 第34作 男はつらいよ 寅次郎真実一路（1984年12月28日）
- 第35作 男はつらいよ 寅次郎恋愛塾（1985年8月3日）
- 第36作 男はつらいよ 柴又より愛をこめて（1985年12月28日）
- 第37作 男はつらいよ 幸福の青い鳥（1986年12月20日）
- 第38作 男はつらいよ 知床慕情（1987年8月15日）
- 第39作 男はつらいよ 寅次郎物語（1987年12月26日）
- 第40作 男はつらいよ 寅次郎サラダ記念日（1988年12月24日）
- 第41作 男はつらいよ 寅次郎心の旅路（1988年8月5日）
- 第42作 男はつらいよ ぼくの伯父さん（1989年12月27日）
- 第43作 男はつらいよ 寅次郎の休日（1990年12月22日）
- 第44作 男はつらいよ 寅次郎の告白（1991年12月21日）
- 第45作 男はつらいよ 寅次郎の青春（1992年12月26日）
- 第46作 男はつらいよ 寅次郎の縁談（1993年12月25日）
- 第47作 男はつらいよ 拝啓 車寅次郎様（1994年12月23日）
- 第48作 男はつらいよ 寅次郎紅の花（1995年12月23日）

3 レギュラーキャラクターの紹介

・車寅次郎（渥美清）

「男はつらいよ」を全く観たことがない人でも、「寅さん」という名前はどこかしらで聞いたことがあるのではないだろうか。その「寅さん」の本名は「車寅次郎」である。一度見たら絶対にわすれられない四角い顔には、つぶらな瞳がキュートに、そしていたずらっぽく輝く。ダボシャツ、ステテコ、腹巻きが彼の定番スタイルである。

寅さんは、葛飾柴又・帝釈天の門前町にある老舗の団子屋「とらや」（第40作以降は「くるまや」）の5代目主人である車平造と、かつて柴又にいた芸者・菊の子として生まれた。16歳のとき「つまらねえことで親父と大喧嘩、頭を血の出るほどブン殴られて、そのまんまパイッと家をおん出で」しまう（第1作「男はつらいよ」）。20年ぶりに故郷の柴又に帰ってくると、父親は亡くなったあとだった。

家出した寅さんは、流浪の果てにテキヤとなり、以来ずっとテキヤをして暮らしている。とらやの人々はみんな、寅さんが堅気の職業に就き、身を固め、まっとうな暮らし方をすることを切望している。寅さんはその願いを知っているし、自分でもテキヤがまっとうだとは思っていない。シリーズ中何度も固い決意をしてテキヤ以外の職業に就こうと奮闘するのだが、どれも続かない。というわけで寅さんはトランクひとつで日本中を旅してテキヤを続けている。そして、年に数回、ふらりととらやに帰る。

性格は明朗で人情に厚く惚れっぽい。和食党で、芋の煮ところがしやがんどきが好物である。第48作「寅次郎 紅の花」で寅さんはピーナツの塩ゆでが好きであることがわかったので、わたしも試しに食べてみたところ、これはちょっとまずかった。

・諏訪さくら（倍賞千恵子）

さくらは寅さんの腹違いの妹である。とらや5代目主人・平造の長女として生まれた。両親と秀才の兄を幼い時に亡くし、叔父の竜造夫婦に育てられた。兄・寅次郎が家出したとき見送ったのはさくらただひとりだった。

高校を卒業すると丸の内のオリエンタル電機に勤務する。そこで縁談をもらうが、20年ぶりに帰ってきた寅さんがのこのことお見合いについて行ったため、縁談は破局する。本来お見合いに同行するはずの

叔父（おいちゃん）が、寅さんが帰ってきたのがうれしくて前の晩に飲みすぎ、二日酔いで動けなくなってしまったので、代わりを寅さんに頼んだのだ。しかし、これまた寅さんのおかげで、とらやの裏にある印刷工場で働く諏訪博とさくらは結婚する。そして翌年には満男が誕生する（以上のエピソードは第1作より）。

さくらはやさしい性格で、兄をいつも心配している。「お兄ちゃん。何か辛いことがあったら、いつでも帰ってきていいのよ」、さくらは旅立つ寅さんにそう告げる。これを聞いてうるっとするのは寅さんだけではないだろう。帰る場所がある。自分を待つ人がいる。これ以上の幸せはきつくない。

・諏訪博（前田吟）

博はさくらの夫で、満男の父親である。大学教授の父に反発して家を飛び出して職を転々としたのち、とらやの裏にある印刷工場（朝日印刷）の社長に拾われて入社する。会社の独身寮にいたとき、さくらに恋をする。それを知った寅さんに河原へ呼び出されて叩きのめされそうになるが、博は自分の思いを真剣に寅さんに伝えた。このとき、博は真剣になるあまり寅さんのことを「兄さん」と連呼しているのがおもしろい。何度も「兄さん」と呼ばれた寅さんは「まだ兄さんじゃない！」と一喝する。しかし最後には博の真剣さを受け入れ、ふたりの仲を取り持つ。そしてふたりはめでたく結婚する。翌年、満男が生まれて家族が3人になると、アパート暮らしを経て、江戸川近くに念願のマイホームをローンで購入した（第26作「寅次郎かもめ歌」）。

博は論理的な思考の持ち主で、生真面目な性格ゆえに義兄の寅さんと言い争いになることがよくある。わたしは、そのときの博の「それはですね兄さん」という口癖が好きだ。博の「さるかに合戦の白みみたいなアゴ（第11作「寅次郎忘れな草」で寅さんがこう言う）」も好きだ。

・諏訪満男（中村はやと・沖田康治・吉岡秀隆）

満男は、わたしが「男はつらいよ」のファンとなるきっかけとなったキャラクターである。第1～26作を中村はやと（第9作のみ沖田康治）、第27～48作を吉岡秀隆が演じている。

満男はさくらと博のひとり息子だ。両親の心配をよそに伯父（寅さん）の言動から多大な影響を受けてきた。性格は、基本的にはシャイでおとなしいが、情熱的な面もある。

高校卒業後、一浪して大学の経済学部に進学する。浪人時代には高校の吹奏楽部の後輩・及川泉（後藤久美子）に恋い焦がれ、彼女のいる佐賀県までオートバイを飛ばしたこともある。しかし、泉への気持ちをストレートに伝えることは長い間できないでいる。第48作「寅次郎 紅の花」で泉が結婚することになったとき、ようやく自分の気持ちに正直になることができ、沖縄・奄美の加計呂麻島で彼女に愛を告白する。

・おいちゃん（森川信・松村達雄・下條正巳）

おいちゃんの本名は車竜造という。とらや6代目主人だ。寅さんの父親である先代主人・平造の弟で、兄の死後店を継いだ。子どものいない竜造夫婦は寅さんとさくらの親代わりとなってふたりを育ててきたが、寅さんは16歳のときに家出してしまう。それ以来、さくらを実の娘のようにかわいがってきた。20年ぶりに帰ってきた寅さんとは何かにつけて衝突し、大喧嘩する。

おいちゃん役俳優はシリーズで3人もいる。第1～8作を森川信、第9～13作を松村達雄、第14～48作を下條正巳が演じている。基本キャラクターは変わらないが、やはり俳優によるキャラクターの違いは少なからずある。わたしは、どのおいちゃんも好きだ。しかし最初に見たのが下條正巳だったので、わたしの中では「おいちゃん＝下條正巳」というイメージが強い。第23作「翔んでる寅次郎」の「あいつ（寅さん）のは意見じゃありません、偏見です」というセリフがたまらなく好きだ。

・おばちゃん（三崎千恵子）

本名は車つねという。若い頃の夢は日本橋の大きな呉服屋の女将さんになること（第21作「寅次郎わが道をゆく」）だったが、竜造と見合い結婚をした。結婚前に浅草でデートしたふたりはにわか雨にあり、駒形のおじさんの家で雨宿りをさせてもらうことになる。おじさんの計らいで、2階の座敷にふたりきりになったところへ落雷が轟き、思わずおばちゃんがおいちゃんに抱きついて…という次第で、ふたりの仲は決定的となった。

おばちゃんは店を切り盛りしながら家事もこなしている。性格はやさしくて涙もろく、しっかり者である。料理が得意で、寅さんが久しぶりに帰ってくると、手料理であたたかく迎える。

・タコ社長（太宰久雄）

本名は桂梅太郎だが、幼なじみの寅さんにかからかわれて「タコ社長」と呼ばれている。印刷工から叩き上げ、工場兼住居を構えるまでに至ったものの、いつも金策に悩まされている。口癖は「困った、困った」である。

・御前様（笠智衆）

葛飾柴又の帝釈天の住職で、とらやの住人をはじめ近所の人々からは親しみと尊敬をこめて「御前様」と呼ばれている。帝釈天には付属の幼稚園もあり、その園長も務めている。安定した生活を持たない寅さんをやさしく諭す。

御前様を演じる笠智衆はやけに坊さん姿が似合うなと思っていたら、彼は元・お坊さんだったことがわかった。

・源公（佐藤蛾次郎）

本名は源吉という。関西で生まれたが、生後すぐに母と死別した。そして、いつしか柴又に住み着いた。寅次郎の舎弟だったが、とらやを手伝うようになり、のちに御前様に諭されて寺男として働くことになった。普段は庭掃除をしたり、水撒きをしたり、と真面目に働いているが、ときには叱られることもある（第23作「翔んでる寅次郎」では「兄貴が嫁さん連れてきた！」と近所を走り回って鐘つきを忘れ、きついお叱りを受けた）。

寅さんのことは「兄貴」と呼んで慕っているが、寅さんが失敗したり、失恋したりすると陰で笑っていることもある。

第2章 「男はつらいよ」を構成する三大要素

1 寅さんの話術

①悪たれ言葉

「男はつらいよ」は、言葉のおもしろさを存分に味わえる映画である。作品をまだ一度も観たことがないという人はぜひ観てほしい。あなたの心をつかむ言葉がきっとあるはずだ。

わたしの場合、最初に魅了されたのは寅さんの悪たれ言葉だった。悪たれ言葉とは、たとえば「たいしたもんだよ蛙のションベン、見上げたもんだよ屋根屋のフンドシ」「結構毛だらけ猫灰だらけ、お尻のまわりはクソだらけ」といった、まあ、かなり下品なものである。しかし、そこがいいのだ。

わたしの脳内は未だに小学生なので「うんこ」の類の言葉を聞くと、もうそれだけで大爆笑してしまう。自らも、チャンスがあれば「うんこ」と言いまくりたい、とウズウズしている。この間友だちと飲みに行ったとき、居酒屋のお姉さんが「ただいま忘年会特別メニューとなっております、通常のウコンドリンクか、カシス風味のウコンドリンクが付いてきますが、どちらがよろしいですか」と聞いた。わたし

は「普通のうんこでお願いします！」と元氣よく注文したかったのだが、やめておいた。その友だち（3人）と会うのは久しぶりだったので、いきなりそんな発言をしたら「何、コイツ。いい歳こいて『うんこ』とかバカじゃないの」と引かれてしまう、と思ったからだ。そして、みんなの「俺、フツウのウコン」「あたしも」「わたしも普通のウコンにする」「てか、カシス風味のウコンって何？」という会話を脳内で「俺、フツウのうんこ」「あたしも」「わたしも普通のうんこにする」「てか、カシス風味のうんこって何？」と変換し、一人楽しんでた。

わたしのうんこ好きは筋金入りで、幼い頃の愛読書は動物のうんこがたくさん載った本だった。これだけうんこに対して情熱的なわたしなので、寅さんの下品な悪たれ言葉に魅了されるのは当然のことだったのだ。

しかし、寅さんの悪たれ言葉に惹かれたのは、うんこの類の言葉が入っているから、だけではない。前述した悪たれ言葉を声に出して読んでみてほしい。実に心地いいリズムではないだろうか。寅さんの悪たれ言葉には、リズムのよさと言葉遊びのようなおもしろさがある。だから、言葉の内容自体はかなりひどいものだが、言われた相手は言葉のおもしろさの方に感心するので毒を感じない。むしろ親密さが増す。

歌舞伎には豪華な悪たれ言葉がたくさんあるそうだ。昔の人たちは、堅苦しい儀礼的な言葉づかいに長けていた反面、無遠慮な言葉で親しくなる必要もあった。そこで使われたのが悪たれ言葉だった。

人の心に土足でズカズカ踏み入るような、本当に悪意のある言葉を口にしてはいけない。しかし、形式的で、当たり障りのない中途半端な言葉ばかりでは、相手と心から打ち解けることはできない。寅さんの悪たれ言葉のような「愛のある毒」が必要なのだ。

わたしもあの場（居酒屋）で堂々と「普通のうんこでお願いします！」と言っていればもっと仲よくなれたかもしれない。わたしは、自分が本当はどう思われているのか不安で「相変わらずかわいいねー！」とか「社会人やってるなんてすごいよー」とか、そんなことばかり口にしてた。相手ともっと親しくなりたいと望むとき、当たり障りのない言葉は壁にしかならない。

②寅のアリア

「男はつらいよ」シリーズには、とらやの茶の間でおいちゃん・おばちゃん・さくら・博・タコ社長に囲まれて寅さんがたっぷり語る場面がたびたびある。この語りの場面を山田洋次監督は「寅のアリア」と呼んでいた。「寅のアリア」は作品の中で重要な位置を占めている。

「言ってみりゃ、リリーも俺と同じ旅人よ。見知らぬ土地を旅する間にゃ、それは人に言えねえ苦労があるのよ…。たとえば、夜汽車の中、いくらも乗っちゃいねえその客もみんな寝ちまって、なぜか俺一人いつまでたっても眠れねえー真っ黒な窓ガラスにホッペタくっつけてじっと外を眺めていると、遠くに灯りがポツンポツン…あー、あんなところにも人が暮らしているんだなあ…汽車がポーッ、ポーッ…ピーッ、そんな時よ、そんな時、なんだかわけもなく悲しくなって、涙がポロポロと出たりするのよ。そういうことってあるだろう、おいちゃん」

これは、第11作「寅次郎忘れな草」の中の寅のアリアである。旅先で出会った三流歌手リリーのことを思いながら、とらやのみんなに彼女のことを語っているものだ。

「男はつらいよ」シリーズでは、一度描かれたことが回想シーンでもう一度出てくることはない。わたしは、卒論を書くにあたって読んだ本で、はじめてこのことに気がついた。回想シーンは皆無だが、寅さんの語りによって一度描かれたことがくり返されることは多い。映像でくり返されるよりも、寅さんの語りで頭の中にその景色を思い浮かべる方がずっと鮮明だ。これは、語る人に相当の力量がなければできない技である。

③啖呵売

映画の原点となったテレビドラマ「男はつらいよ」の企画打ち合わせの席で、渥美清は少年時代に憧れたテキヤの口上を再現した。それに聴き入った山田洋次はテキヤの物語を作ろうと決意する。渥美清の体験が寅さんの啖呵売になったというわけだ。

啖呵売は商売のための口上だが、寅さんにとってはコミュニケーションの大事な道具でもある。病院で入院患者を笑わせたり、マドンナを励ましたりすることができる。ちなみに「啖呵売」の読み方だが、シリーズ当初は「タクバイ」と読んでいた。今では「タンカバイ」と読んでいる。

「さア、もうやけだ…持って行きやがれ好きなものを持って行け！ねえ、やけのやんばち日焼けのなすび、色が黒くて喰い付きたいが、わたしゃ入歯で歯が立たないよっときやがった、ね、角は一流デパート赤木屋黒木屋白木屋さんで紅白粉つけたお姐ちゃんに下さい頂戴で頂きますと五百が六百下らない品物ですが今日はそんなこと言いません。何故かっていうと神田は六法堂という書店が僅か三十万円の税金で泣きの涙で投げ出した品物です。四百、三百、二百、百両だ。どうだ！これでも買わない、ようし、もうこうなったら…（第1作「男はつらいよ」より。商品は古本ととげぬき地蔵）」

啖呵売は厳しい。落語や講談の場合、その聞き手はお金を払って客席に座る。「たっぷり楽しませてもらうまで帰らないぞ」という心構えが十分にできている。しかし、啖呵売の場合は違う。路上で物売っているわけだから、客は通りすがりの人だ。通りすがりの人を呼び止めて、耳を傾けさせ、商品を売る。テキヤの啖呵がつまらなければ人はすぐ離れていってしまう。落語や講談をするために話術がいることは言うまでもないが、啖呵売にも相当鍛え抜かれた話術が必要なのだ。

④渥美清は話術をどう身につけたのか

「男はつらいよ」は、渥美清の話術なくしては成り立たないことがわかった。それでは、彼は一体いつどこでどのようにこの話術を身につけたのだろうか。

渥美清は、あのタフそうな外見とは異なり病気がちな子どもだった。関節炎やら小児腎臓やらで、ろくに小学校へも行けなかった。家で寝ているとき、彼はよくラジオを聴いていた。昭和10年代のことである。テレビはまだなく、ラジオが最大の娯楽という時代だった。まだ民放はなく、日本放送協会だけで、しかもまだ戦争中であったため、低俗番組に類するものは全くなかった。娯楽番組といえば浪曲や講談、落語、ラジオドラマ、小説の朗読で、これらはどれも見えない情景を話術で想像させるという芸だった。そして、今と違い、当時限られたラジオの芸能番組に出演できたのは鍛え抜かれた一流の芸人たちだけだった。渥美清は、休んでばかりいたため学校では劣等生だったが、ラジオで学んで母を相手に修練していた話術はすでに相当の程度に達していたらしい。

中学時代は不良っぽい連中と付き合っていた。そのためテキヤのお兄さんの知り合いも少なくなく、彼はその啖呵売の口上に魅せられ、その啖呵の数々をノートにとって研究した。

やがて渥美清は軽劇団の俳優になる。客に向かって喋ることが職業になり、自身の話術を洗練させていくことになるが、彼の演技の最も重要な部分は役者になる前からすでに基本はでき上がっていたようだ。

渥美清の話術には特定の師匠がいるわけではなく、いわば我流である。しかし、特定の師につくことには、その道の型にはまりやすくなるという欠点がある。渥美清の話術は、自らがふれた本物をお手本に、それらを自分で自由に取捨選択して作り上げられたものである。そこには、型に縛られない独自のユーモアがある。

2 美しきマドンナたち

①全48作品のマドンナリスト

マドンナとはイタリア語で「憧れの女性」という意味だ。「男はつらいよ」シリーズにはどの作品にも必ず寅さんが思いを寄せる美しいマドンナが登場する。まずは作品に登場するマドンナたちを紹介したい。

- 第1作 男はつらいよ (光本幸子)
- 第2作 続 男はつらいよ (佐藤オリエ)
- 第3作 男はつらいよ フーテンの寅 (新珠三千代)
- 第4作 新 男はつらいよ (栗原小巻)
- 第5作 男はつらいよ 望郷篇 (長山藍子)
- 第6作 男はつらいよ 純情篇 (若尾文子)
- 第7作 男はつらいよ 奮闘篇 (榊原るみ)
- 第8作 男はつらいよ 寅次郎恋歌 (池内淳子)
- 第9作 男はつらいよ 柴又慕情 (吉永小百合)
- 第10作 男はつらいよ 寅次郎夢枕 (八千草薫)
- 第11作 男はつらいよ 寅次郎忘れな草 (浅丘ルリ子)
- 第12作 男はつらいよ 私の寅さん (岸恵子)
- 第13作 男はつらいよ 寅次郎恋やつれ (吉永小百合)
- 第14作 男はつらいよ 寅次郎子守唄 (十朱幸代)
- 第15作 男はつらいよ 寅次郎相合い傘 (浅丘ルリ子)
- 第16作 男はつらいよ 柴又立志篇 (榎山文枝)
- 第17作 男はつらいよ 寅次郎夕焼け小焼け (太地喜和子)
- 第18作 男はつらいよ 寅次郎純情詩集 (京マチ子)
- 第19作 男はつらいよ 寅次郎と殿様 (真野響子)
- 第20作 男はつらいよ 寅次郎頑張れ! (藤村志保)
- 第21作 男はつらいよ 寅次郎わが道をゆく (木の実ナナ)
- 第22作 男はつらいよ 噂の寅次郎 (大原麗子)
- 第23作 男はつらいよ 翔んでる寅次郎 (桃井かおり)
- 第24作 男はつらいよ 寅次郎春の夢 (香川京子)
- 第25作 男はつらいよ 寅次郎ハイビスカスの花 (浅丘ルリ子)
- 第26作 男はつらいよ 寅次郎かもめ歌 (伊藤蘭)
- 第27作 男はつらいよ 浪花の恋の寅次郎 (松坂慶子)
- 第28作 男はつらいよ 寅次郎紙風船 (岸本加世子)
- 第29作 男はつらいよ 寅次郎あじさいの恋 (いしだあゆみ)
- 第30作 男はつらいよ 花も嵐も寅次郎 (田中裕子)
- 第31作 男はつらいよ 旅と女と寅次郎 (都はるみ)
- 第32作 男はつらいよ 口笛を吹く寅次郎 (竹下景子)
- 第33作 男はつらいよ 夜霧にむせぶ寅次郎 (中原理恵)
- 第34作 男はつらいよ 寅次郎真実一路 (大原麗子)
- 第35作 男はつらいよ 寅次郎恋愛塾 (樋口可南子)
- 第36作 男はつらいよ 柴又より愛をこめて (栗原小巻)
- 第37作 男はつらいよ 幸福の青い鳥 (志穂美悦子)
- 第38作 男はつらいよ 知床慕情 (竹下景子)

- 第39作 男はつらいよ 寅次郎物語 (秋吉久美子)
- 第40作 男はつらいよ 寅次郎サラダ記念日 (三田佳子)
- 第41作 男はつらいよ 寅次郎心の旅路 (竹下景子)
- 第42作 男はつらいよ ぼくの伯父さん (後藤久美子)
- 第43作 男はつらいよ 寅次郎の休日 (後藤久美子)
- 第44作 男はつらいよ 寅次郎の告白 (後藤久美子)
- 第45作 男はつらいよ 寅次郎の青春 (後藤久美子)
- 第46作 男はつらいよ 寅次郎の縁談 (松坂慶子)
- 第47作 男はつらいよ 拝啓 車寅次郎様 (かたせ梨乃)
- 第48作 男はつらいよ 寅次郎紅の花 (浅丘ルリ子)

②マドンナの新パターン、リリー

寅さんの恋はマドンナへの同情からはじまることが多い。寅さんは渡世人としてよりもむしろ、どれだけ深くかわいそうな女に同情し、尽くしたか、で男を磨いている。

しかし、そのパターンにあてはまらないマドンナもいる。その代表は浅丘ルリ子演じるリリーだ。リリーは全国のキャバレーで歌う三流歌手である。ふるさとはない。寅さんと同じ旅暮らしで、ヤクザな仕事をしていて、根無し草なのだ。寅さんが彼女に対して思うのは同情ではなく、共感である。

リリーと寅さんの恋はいわば「腐れ縁もの」というやつで、これは日本に伝統的にある特異な恋愛ものである。「惚れたはれたは不良のやること」というのが日本人の伝統的な恋愛観だった。だから、日本の男性は女性に対しての愛情コミュニケーションが下手で、それゆえ逆説的コミュニケーションを工夫せざるを得なかった。「逆説的」とはつまり、悪口やヘラズロを使うことである。しかし、堅気の真面目な人間は悪口もヘラズロも下手だった。それらが得意で似合うのは落ちこぼれの人間で、その落ちこぼれ同士の恋物語が「腐れ縁もの」というわけである。

リリーはマドンナの中でもとくに人気があり、4作品に登場している(第11作「寅次郎忘れな草」、第15作「寅次郎相合い傘」、第25作「寅次郎ハイビスカスの花」、第48作「寅次郎紅の花」)。複数回登場する女優は浅丘ルリ子以外にもいるが(吉永小百合、大原麗子、松坂慶子、栗原小巻、竹下景子)作品が変わっても同じ役で出ているのは浅丘ルリ子のリリーしかいない。リリーシリーズがとくに完成度が高く感じられるのは「腐れ縁もの」という型にストレートに乗っているからなのだ。

3 旅人とふるさと

「男はつらいよ」は旅人と定住者の物語である。寅さんは通称「フーテンの寅」といい、テキヤとして日本中を旅している。風の吹くまま気の向くまま、自由で無責任な放浪者だ。柴又の人々はあくせく地道に働き、真面目で、まっとうで、良識の枠を決してはみ出さない。

寅さんと柴又の人々は対立しているが、同時に両立している。寅さんが人情ぶりを発揮できるのは柴又の人たちがいるからである。寅さんは旅先で出会った困っている人に「何かあったら柴又にあるとらやという団子屋に行きな」とよく言うが、これは柴又というふるさがなければ言えない言葉だ。柴又は、寅さんが帰ってくることで花が咲く。彼らは、寅さんがよそから事件を持ち込んできてくれるおかげで感動的なひとときを過ごすことができる。大騒ぎして知恵をしぼる。かわいそうな人の力になる。どれも寅さんなしでは体験できないことだ。非常識な落ちこぼれと思われている寅さんだが、存在意義はちゃんとある。そのことをよく表しているのが旅立つ寅さんを見送るさくらのこの言葉である。「お兄ちゃんがいな

いとね、みんな黙ってテレビ見てごはん食べて、それでおやすみなさいって寝るだけなの。お兄ちゃん今ごろどうしてるかなあって、みんなそう思ってるのよ（第13作「寅次郎恋やつれ」）。

寅さんと柴又の人々、両者は互いに相手が必要なのだ。もし相手がいなかったらどんなにさびしいだろうか。寅さんは人情ぶりを発揮しようにもできないし、辛いことがあっても帰る場所はない。柴又の人々は単調な毎日をひたすらおくるだけだろう。「男はつらいよ」のおもしろさの背後には、そうした現実のさびしさやわびしさがある。それが、この作品の深みなのだ。

第3章 寅さんの魅力

1 相手の幸せを心から願う

「男はつらいよ」シリーズでわたしがいちばん好きな作品は第23作「翔んでる寅次郎」だ。ストーリーはこのようなものである。北海道を旅していた寅さんは、悪い男に言い寄られていた入江ひとみ（桃井かおり）のピンチを助ける。ひとみは田園調布のお嬢さんで（寅さんは田園地帯の貧しい娘と勘違いする）これまで何一つ不自由なく育ってきた。しかし、社長の息子と結婚することになり、マリッジブルーに悩んでいた。寅さんは彼女の話聞く。結婚式当日、ひとみはウエディングドレスのままホテルから飛び出し、とらやへ逃げてくる。花婿・小柳邦男（布施明）は申し分のない青年なのだが、ひとみはどうも納得できないらしい。それを知った邦男は金持ちの息子としての生活をやめて、柴又の自動車修理工場で働きます。そんな彼の姿はひとみの心を動かし、ふたりは改めて結婚する。

最後にひとみはこう言う。「今、邦男さんの幸せについて考えています。人のことを一生懸命考えるっていうか、相手の幸せを心から願うっていうか、そういう態度が私にはいちばん欠けていたのね」。マリッジブルーになり、ひとみは本当の幸せについて真剣に考えてきたつもりだったが、その幸せは自分だけの幸せを意味していたことに気がつく。それを教えてくれたのは寅さんだ。

寅さんにとって、恋とは相手の幸せを願うことである。「男はつらいよ」にはさまざまな不幸や悩みを持ったマドンナたちが登場する。寅さんはそんな彼女たちのために献身的に尽くすが、問題を根本から解決することはできない。しかし、マドンナたちには自分の幸せを本気で願ってくれた人がいたという幸福感が与えられる。「寅さんと一緒にいるとほっとする」「寅さんと話していると楽しい気持ちになる」このようなセリフをマドンナたちは口々に言う。彼女たちは寅さんと出会うことで救われていることがわかる。

だから「男はつらいよ」は、寅さんがいつも失恋してもハッピーエンドなのだ。ふられてしまっても、相手が幸せになってくれたら、それで寅さんも幸せになれる。

最後に「翔んでる寅次郎」でわたしがいちばん好きなセリフを紹介したい。

「まあ、もっばら考えていることといえば、ひとみちゃんのことだけだね。僕のどこが嫌いなんだろう。そこを直せば好きになってくれるのかな、とか。そんなことを考えているから嫌われちゃうんだろうけど…」

これは、ひとみが邦男のアパート（邦男は自動車修理工場で働き始めてからアパートで暮らしている）を訪ねた場面での邦男のセリフである。邦男の姿がさびしそうで、悲しそうで、でもカップラーメンをすすりながら話しているからちょっとおかしくて、でもやっぱりさびしそうだった。わたしはなんだか涙がブワブワ出てきて、気がついたら号泣していた。

2 子どもの頃の夢が職業

第21作「寅次郎わが道をゆく」ではとらやの人々の若かりし頃の夢がわかる。さくらはレビューや歌手に憧れ、博は学者になりたかった。おいちゃんは満州の馬賊になるつもりだったし、おばちゃんは日本橋の大きな呉服屋の女将を夢見ていた。寅さんも自分の夢を語る。

「俺はね、鼻っタレ小僧のときはチンドン屋になりたかったの。ね、チンドンドン。で、小学生のときはサーカスに入りたくてな。わすれもしねえ、中学んときはテキヤに憧れてな。四谷、赤坂、麴町、チャラチャラ流れるお茶の水、粋な姐ちゃん立ちションベン—まあ、俺は俺なりに貧しい小さな夢を持っていたわけだよ。今は結局こうやって…あ、俺ずっとそれやってんのか」

寅さんは、子どもの頃憧れていた職業に就いているのだ。

とらやの人々の夢を知って、わたしも自分の夢を思い返してみた。小学生のときは声優、中学生のときはプロの演奏家（その当時はトランペット奏者）、高校生のときは英語か幼稚園の先生になりたかった。大学1年生のときは再び声優に憧れ、劇団に入ったが、とても自分には向いていないとわかり、すぐにやめてしまった。それからは自分が何になりたいのか、何をやりたいのか、そもそも何ができるのか、何に向いているのかわからなくなって、ロクに就職活動もしなかった。周りにさんざん迷惑と心配をかけ、4年の1月でやっと内定が決まった。内定先は保育園で、1年前はおろか2か月前のわたしでさえ全く想像できなかった職場である。

しかし、内定が決まった今これまでを思い返すと、わたしの夢ってけっこう叶っているのではないか、という気がしてきた。声優は無理だったが、劇団で演技の体験をできたので心残りはない。英語の先生は塾のアルバイトで叶っているし、幼稚園の先生は、幼稚園か保育園かという違いはあるが、幼稚園とテキヤほど大きな違いではないので、これも叶っていると言えるだろう。演奏家という夢も大学のチャペルアワーの奏楽者という形で叶っている。なんだ、わたしってけっこう幸せ者なんだなあ、と気がついた。

夢にしがみつすぎると、いろいろなものを犠牲にしてしまう。それは嫌だ。でも、夢と現実生活があまりにもかけ離れているのも困る。寅さんのように「あ、俺ずっとそれやってんのか」というくらいがちょうどいい。「あ、俺ずっとそれやってんのか」は、理想通り生きるキーワードなのかもしれない。

あとがき

高校2年生のとき『男はつらいよ パーフェクト・ガイド—寅次郎全部見せます』という本を買った。名言集CDも買った。

大学1年生のとき柴又に行った。2年生のときは小諸の寅さん記念館に行った。

寅さんをテーマとして卒業論文を書くことは決められていたようなものなのだ（とか言うわりになかなかテーマが決まらず、どうしようか、というときに「わたしには寅さんがあった！」と気がついた。寅さんが身近すぎてかえって気がつかなかったのだ）。

好きなものをテーマに選んだが、それで文章を書くとなると大変だった（なかなか書き進めず、卒論のためと言ってお気に入りのリリーシリーズと「翔んでる寅次郎」を観てばかりいたわたしが悪いのだが。完全に時間配分のミスだった。そもそも、最初に時間配分をしておく、なんて優秀なことはしていなかったけど）。

この地球上で、今わたしほど寅さんのことを考えている人間はいないんじゃないか、とさえ思った（そんなことはない）。寅さん！難攻不落！と寅さんがいやになりかけたこともあった（100%自分のせいで

あることは承知の上で)。

しかし、コタツでうがうが文章を書いているとき(アパートにパソコンはないので)決まって流すのは寅さん発言集CDだった。んもう!寅さんなんて!卒論はつらいよ!と投げ出したくなる時も、寅さんやとらやの人々の声を聞いていると不思議と気力がでてきて、なんとかこうとか書くことができた(と言っていいのかわからないが)。

卒業旅行(個人的な)は柴又、と決めている。草団子を食べ、葛飾柴又寅さん記念館に行こう(大学1年生のときは時間の都合で行けなかったのだ。草団子は2皿食べた)。

わたしの寅さん生活はまだまだ続く。

参考文献

- 井上ひさし監修『寅さん大全』 筑摩書房 1993年。
五十嵐敬司『寅さんの旅「男はつらいよ」ロケハン覚え書き』日本経済新聞社 1993年。
佐藤忠男『みんなの寅さん「男はつらいよ」の世界』朝日文庫 1993年
嶋田豊『車寅次郎の世界 増補・改訂版「男はつらいよ」全作品読解』シネ・フロント社 1997年。
松竹株式会社『男はつらいよ フーテンの寅さん25年の足跡』廣済堂出版 1995年。
——。『教養・文化シリーズ 男はつらいよパーフェクト・ガイド 寅次郎全部見せます』NHK出版 2005年。
寅さん倶楽部編『「男はつらいよ」寅さん読本 監督、出演者とたどる全足跡』PHP文庫 1996年。
西川幸夫『「男はつらいよ」水彩スケッチ 寅さんが旅した風景』日貿出版社 2003年
山田洋次監修『男はつらいよ・寅さんの歩いた日本』近畿日本ツーリスト 1997年。
山田洋次・朝間義隆作 寅さん倶楽部編『男はつらいよ 寅さんの人生語録』PHP文庫 1993年。
吉村英夫『男はつらいよ 魅力大全』講談社 1992年。
——。『完全版「男はつらいよ」の世界』集英社 1997年。
——。『寅さんと麗しのマドンナたち』実業之日本社 2002年。

(卒業論文指導教員 大澤秀夫)